

花より団子、月より最中。



そらんぽ四日市  
ホームページ

旧暦八月十五日の夜を「十五夜」と言い、古くからお月見をする風習があります。別名を「中秋の名月」。旧暦では七月、八月、九月を秋とすることから、中秋は秋の真ん中を意味します。

そんな十五夜の月に、「最中の月」という呼び方があります。元となったのは、平安時代の歌人源順の歌です。「水の面に 照る月なみを かぞふれば 今宵ぞ秋の 最中なりける」と、秋の最中、つまり中秋の月の美しさを詠みました。このときの月見の宴で出されたお菓子こそ最中の月。白くて丸い餅菓子を見た貴族たちが、先の歌からこう呼びました。

☎ 博物館・プラネタリウム (TEL) 355-2700 (FAX) 355-2704

さらに時代は下り、江戸時代には吉原の竹村伊勢という煎餅屋が同名のお菓子を売り出し、庶民に広まります。当時は煎餅のようなものでしたが、この最中の月で餡を挟んだ最中饅頭が主流となり、さらにはさまざまに形を変え、名前も略されて、私たちが良く知る和菓子「最中」に繋がったとされています。

今年の十五夜は9月10日です。最中の月を眺めることを口実に、供え物に最中を加えてみてはいかがでしょうか。

©丸井屋老舗  
(大矢知町)



富田一色町の広小路とまちなみ

富田一色町には、寛永16 (1639) 年の大火後に防火のため、山の神町を取り壊して設けられた広小路があり、この広小路通りで開催される「けんか祭り」は、飛鳥神社に練り込もうとする鉦の組と阻止する太鼓の組との間で勇壮に繰り広げられます。

江戸時代末、富田一色湊を擁する当地には廻船業者が多く、海運橋から東西に延びる八風街道の整備で陸海の交通が発達しました。明治時代に東洋紡績富田工場ができると、港が手狭になり塩役運河が改修されました。八風街道の両側には戦前に漁網生産販売日本一を誇った平田紡績ゆかりの建物や蔵



富田一色町の飛鳥神社へと続く広小路

が往時をしのばせています。

5月上旬号掲載の「四日市萬古の祖山中忠左衛門」について、発行後に「四日市萬古の祖は唯福寺第十三世住職田端教正師であり、周辺的生活困窮者に職を与えて救済することであった」というご指摘を頂きました。貴重なご意見をありがとうございました。今後の萬古焼研究に生かしてまいります。

☎ 文化課 (TEL) 354-8240 (FAX) 354-4873